

尚綱子育て研究センター

児やらい

koyarai vol.11 2014

Child-rearing to generate mutual recognition
Child Studies Center at Shokei

第11巻 2014年



はじめに

現在、地域の自治体に権限が委譲されるかたちで保育の新制度改革が進められている。これまでの中央集権的な保育施策にみられたトップダウン（上意下達的）体質を猛省し、実際に子どもを育てる保育現場にこそ裁量権が委ねられるよう、現場に近い窓口へと決定権が移行していくことにはいくらかの意味もあるだろう。しかし、幾重にも課題の重なる子どもや女性の貧困状態、発達に支援の必要な子どもの困難、離職の早い保育現場におこっている保育者不足など、山積する保育の諸問題に対し、適切な対応ができる地方自治体が今どれほど組織され得るのか、まだまだ不安も多い。

保育の新しい体制が生まれつつある現在、私たちは、我が国の知的財産である日本国憲法や児童福祉法の理念を何度も確認しつつ、人が豊かに暮らせる地域社会を創るのは私たち自身にほかならないことを自覚する必要があるように思う。いつの時代もそうだろうが、批判すれば事足りる「他人事」としてではなく「我が事」として目の前の課題に取り組む人をこそ大切にする社会でありたい。＜当事者＞という視点が学問的に提示されてから幾年か経ったが、当事者による日常を大切にしようとする傾向が、徐々にではあれ、実践としても現れていることをそここで感じるようになったのは私だけだろうか。

世の流れ（新制度）に迎合するだけでは生活そのものが守れないこともあるだろうし、かといって出される提案をすべて批判するだけでは次のヴィジョンが描けない。すべての子どもが心底笑える毎日を地域社会に実現できるよう、私たち自身が「あたりまえの日常」につながる大きな物語（グランドデザイン）を描かなくてはならない時がきていると思う。保育とは明日を創るクリエイティブな仕事である。であればこそ、保育者養成校に課せられた使命もまた創造的なものにほかならない。保育者も、園に通う親も子も、すべての人が幸せだと感じられるような保育の場を地域に創り出していくことができるかどうか。保育者養成校に課せられた責任は重い。今後も、異なる分野の研究者同士が集い、領域横断的に研究を重ねていきたいと思っている。

尚綱大学短期大学部子育て研究センターは、平成12（2000）年6月、短期大学部の研究機関として設置され、幼児教育学科の研究員を中心に活動が展開されてきた。発足から十数年を経て、平成25（2013）年度より、子育て研究センターは尚綱大学全体にかかる組織として「尚綱子育て研究センター」へと発展的に改組された。この再出発は、保育者養成校に期待される社会的役割の深化・拡大に応じ、より多くの学問分野からなる思索や調査を子育て・子育て研究へと蓄積していこうとするものである。

尚綱OG（幼児教育学科出身）の現職保育者に対するリカレント教育の場としてはもちろん、地域における子育ての拠点としても活用していただけるよう、誰にでも開かれた保育研究と保育者養成実践を当センターに創り出していきたいと思う。

平成26年6月30日

尚綱子育て研究センター長

塩崎美穂

『児やらい』発行の意義

「児（こ）をやらう」とは、ある年齢以上になった子どもを「家」から「共同体」のなかに放り出し、親離れ／子離れするという意味である。日本社会でひろく実践されてきた子育て習俗の一つであり、育つ子どもと育てる大人、その双方の〈育ち〉を包括する概念である。

つまり「児やらい」とは、子どもを後ろから追って次の世界に送り出すこと、子どもの背中をおして子ども自身が自らの人生を引き受けることを促す営みである。そしてそれは、とりもなおさず、現在、〈保育=child care and education〉や〈教育=education〉と呼ばれていることの内実には他ならない。

日本語の“教育”という語は、「近代学校教育」と同義に使われることが少なくないが、学校教育としてイメージされている“教育”はinstruction、すなわち「教え諭すこと」「指導すること」「誘導すること」の意味に肥大化している。もはや日本語の“教育”は、Educationの訳語としては不適切なほど学校教育のみに集約された語感をもつ。

しかし、明治期に翻訳した際の語源であるEducationということばは、さらに本来のラテン語の意味にさかのぼれば「生きることを共に喜ぶ」という意味である。というよりむしろ、確認すべきは、Educationには、「教える」という意味はないことだろう。ことば本来の意味は、Care（他者に配慮し）とCure（人を癒し励ます）とほぼ同義、すなわち教育とは「共に幸せに生きる」という意にこそ近い。明治期、Educationは「教育」と翻訳されると同時に「保育」とも訳された。いうまでもなく、「保育」の方がEducation本来の意味に近い（HOIKU≒Education）。

また、ラテン語を語源とする国々では、Educator（エデュケイター）とは保育者／社会教育者を指すことばである。それには、学校にいるTeacher（教師）とは異なる、「魂を吹き込む人」というほどの意味がある。生涯を通じて、人間の独立、個人の尊厳をまもるために、人々を支えてきた人を〈保育者〉Educatorと呼ぶ文化がある。

誤訳ともいえる「教育」の使われ方を今こそ見直し、世代をつなぐ、生命をつなぐことをたのしむことができる社会を構想したい。「児やらい」を可能にする社会構造や社会思想に敷衍した研究を、本誌『児やらい』に蓄積していくことはできないだろうか。ひきこもり百万人といわれる現在、人嫌いが瀰漫した社会を刷新し、あらたな「絆」や「居場所」づくりを意識しつつ、広く本誌を活用していただきたい。

目 次

はじめに

『児やらい』発行の意義

I 論文

- 1 こころの間診票の活用…………… 3
～中学校と保育者養成校（短期大学）との実態比較による一考察～
緒方 宏明
- 2 学業的延引行動と保育者効力感、学業成績および実習評価との関連…………… 17
～保育内容研究Ⅳ「言葉B」の授業実践からの一考察～
小川内 哲生
- 3 保育者養成の現状を踏まえたキャリア支援…………… 25
横山 博之
- 4 学問領域としての「彫刻」的観点からみた…………… 39
「立体」の造形活動における「空間」と「量」という視点
坂本 健
- 5 「保育」をイメージできる保育内容総論にむけて…………… 51
－保育者養成課程における短大一年前期の授業ノート－
塩崎 美穂

II 公開シンポジウム記録

- 1 第13回公開シンポジウム記録…………… 57
小西貴士（写真家／清里聖ヨハネ保育園・キープ森のようちえん）
スライドショー「子どもと森へ出かけてみれば」
対談「生命を引き継ぐ暮らしにむけて－種をまくこと目を待つこと」
- 2 清里高原の森より －スライドショーの出会いから一年－…………… 63
小西 貴士
- 3 シンポジストから小西さんへ －感想、そしてこれからへの希望－…………… 65
コメンテーター
山並 啓（やまなみこども園保育士）
岩根 治美（北合志保育園園長）
上妻 利弘（木彫作家）